

思いは人の心を変えられる

中部中・1 森 雪乃

私は、この『しずかな魔女』という本を読んで、思いを伝えることの大切さを学び、あたたかさをもらいました。

この本は、市川朔久子さんという方が書いた本なのですが、お話の中にお話があるというちよつと変わった本です。この本の主人公草子は不登校でその理由がわからずに悩んでいました。それで毎日のように図書館へ行き、出会った物語がこの『しずかな魔女』です。私がこの物語の中で一番好きで、大切なことを学んだシーンは第八章の「消えたひかり」です。そのシーンの少し前、ひかりという野枝の友達が親の離婚によって行ってしまふということが分かり、野枝はなんとかしらうとしてけがをしまいました。そうして家に戻った時にはひかりは行ってしまいました。そこで野枝は

「ひかりがいない。」

といつまでも泣き続けたのです。そこからひかりへの愛がすごく、ものすごく伝わって来て私も泣いてしまいました。悲しいけれど、あたたかくて私はこのシーンが大好きです。また、そのあとのひかりの手紙がこの気持ちを大きくします。それが

「また会える だって同じ地球の上だし」

です。そっけないけれど野枝を元気づけたい思い、やさしさ、ひかり自身の希望も入った文だと思いました。すごく短くてもたくさんいろいろな思いが込められた手紙なんだなと感じました。

私がこの章から学んだこと、それは思いを伝えることの大切さです。この本で野枝は、やっぱりひかりをあきらめきれず分厚い手紙を出します。自分がどんなに楽しかったか、ひかりに会いたいかをたくさん書いた手紙によってひかりは戻ってきました。野枝の願い

はかなったのです。私は、自分の思いを伝えようと努力すれば人の心を変えることができるということを知りました。たとえその言葉がうまくなくても、一生懸命伝えた自分の思いは届くし、結果がよくなるでも、少しでも変えられることがあることも分かりました。言葉って、思いってすごいなと改めて感じました。

私には、離れてしまった友達が二人います。一人は会うことができませんが、もう一人はもう四年以上会えていません。幼稚園のころの友達で、毎日のようにいっしょに仲よく遊んでいました。小学校に入るとほぼ会えなくなりましたが、一年に一度幼稚園で卒業した小学校一〜六年生の集まる会があり、そこで会うことができていました。しかし、二年生の時のその会で引越すことを伝えられませんでした。まだ感情の整理がうまくできなくて、私は最後まで言えませんでした。そこから大きくなり、私もその子も中学生で、つながりといえれば毎年の年賀状くらいです。その年賀状も、

「元気ですか。もう私たちも中学生ですね。」

これくらいしか書きません。私はもう少し思いを伝えてみようと思いました。私は、野枝のように、会いたいとはあまり思っていない。小さいころに仲がとても良くても、これだけ離れていてはもう私のことなんて気にしていかないかもしれないし、私の中のその子と大きくなったその子は全然違うかもしれないからです。実際に、同じ中学校の子で幼稚園が同じだった子がいましたが、すごく変わっていました。この思いで会うのは少しこわいし、思い出のまま閉じ込めておきたい気持ちもあるのではありません。思っているのです。でも私はまだその子のことは好きだし、その子のことを思っています。だから、そのことを全部伝えてみようと思います。もし、私のことなど気にしていなかったと分かっても私はそれでいいのです。今周りにいる友達、これからできる友達を大切にしていこうと思ふのです。

私と同じで草子も思いを伝えようと思ったみたいで、両親に長い

長い手紙を書きました。草子は、

「伝わるかどうかわからない。理解してもらえるかもわからない。それでも、書いてみた。できるだけ正直に、じぶんの気持ちを書けるのは、草子だけなのだ。」

と思ったようです。私は、すごくすごく共感できました。

この本は、あたたかさだけでなく、大切なことを教えてくれました。私は、この文章に書いたことを実行しようと思ったし、これから生きていく上でも大切にしていこうと思いました。私は、本当にこの本に出合えて、この本を読んで、良かったと思いました。将来も誰かに自分の思いを伝えることはあると思うし、意見を伝える場なら山ほどあるので、この話を思い出してがんばりたいです。